

七十年後の同志社教育の完成を見据えて

八田 英二	同志社大学長 同志社大学経済学部教授
講師紹介【はった・えいじ】	【研究テーマ】 日本経済の理論的・実証的分析

なぜ「七十年後」か

おはようございます。同志社大学長の八田でございます。今日はDoshisha Spirit Week、この一週間、いろいろな方がそれぞれのお立場からお話をされるということで、私も一つお話をさせていただきます。「七十年後」と書いてありますが、なぜ七十年後か。今から七十年後というのは、二〇七五年になります。学校法人同志社の前身の同志社英学校が設立されたのが一八七五年。そこから考えますと、ちょうど二〇〇年後になります。なぜ二〇〇年後の同志社教育かといいますと、新島先生が「同志社教育の完成までには二〇〇年かかる」ということをおっしゃったからです。今年、同志社は一三〇周年でございますから、新島先生が考えられた二〇〇年後というのは七十年後でございます。同志社教育の完成を念頭において今後十年、二十年、三十年、同志社教育、特に私は大学をお預かりしている立場ですから、大学教育はこれからどうなっていくのか、これを少し今日は皆さま方にお話をさせていただければいいということで、こういうタイトルをつけました。

十一月は同志社にとりまして記念すべき創立の月です。十一月二十九日には創立記念の行事もあります。昨日の京都新聞に、このチャペルが大きく載っておりました。こういう由緒あるチャペルでお話ができるということも、一つの喜びです。

同志社大学では昭和二十四年に、五番目と六番目の学部が設置されました。それが商学部と工学部でした。商学部は、その前は同志社高商として岩倉に長い歴史をもっておりまして。商学部あるいは高等商業の卒業生の会・樹徳会の高齢の方々は「自分は高商の卒業である」ということを誇りにしておられます。同志社高商は、岩倉で教育・研究活動を展開していました。また、同志社大学の工学部は今は九学科体制に成長しています。以前は六学科でした。それに知識工学科という七学科目ができ、昨年には情報システムデザイン学科と環境システム学科という二つの学科が付け加わって、今は九学科体制になっております。同志社大学はその昭和二十四年（ちょうど私が生まれた年なのですから）から、長い間六学部体制、神、文、法、経、商、そして工学部の六学部体制を五十五年間続けてまいりました。

今日の大学をめぐる状況

二一世紀に入りまして各大学共に大学改革に乗り出しました。今、あちらこちらの記事に、「大学破綻」という言葉が出てきます。少し前には東北文化学園大学が破綻をしました。また、ついこの間は菟国際大学という大学が、民事再生法適用を申請されました。学生のうちの八割は中国からの留学生を受け入れていたそうです。酒田短期大学の中国人学生の問題が起ってからは、入国管理が非常に厳しくなりまして、中国人留学生になかなかビザが与えられない。ということで、菟国際大学は中国人の留学生で成り立っていたんですけども、なかなか入国できなくなって、入学者が激減をして破綻してしまった。ここは広島のコサルティング会社が引き受けるということで、現在、民事再生手続きが進んでいると聞いております。これ以外にも経営が危ない大学、短期大学はだいたい三十ぐらいあるそうです。それぐらい少子化の影響を大学は受けております。つい先日もう文部科学省のOBの方が『強い大学弱い大学』というタイトルの本を出されました。その本では、無作為に抽出した大学を自分の観点から評価し、実名で大学名があげられておりました。AからGまでの評価があったと思います。

先日もう日本経済新聞のスクープだったと思いますが、私立大学が破綻したとき学生が困らないように、破綻保険制度を文部科学省は考えていると書いてありました。学生一人当たり、たとえば千円か二千円をあらかじめ各大学がお金を積み立てておいて、破綻した大学が出れば在学中の学生が卒業するまでは、その大学が運営できるように保険金を支払おうというスキームでした。同志社大学ですと、学生一人について二千円払うことになり、今二万二、三千人在籍していますから年間四千何百万円をそういうところに支払う。そしてプールをして、それを破綻した大学に、学生が卒業するまでは教職員を雇い続けてくださいということで保険がおりる。こういう話が今進んでおります。逆にいえば、どんどん破綻する大学が出てくるという認識で文部科学省が動いているということがわかります。

また株式会社も大学を設置することができるようになりました。来年も何社かの株式会社立の大学院ができあがります。ある予備校が、教育だけの日本教育大学院大学という大学を設置するというところで今審査が進んでいるそうです。あるいは、これは株式会社ではありませんけれども、簿記学校が大学院大学をこしらえるという申請も出ているそうです。大学にとりまして最も利益が見込める分野に出てくるわけで、株式会社とか予備校は損をする分野には進出いたしません。従来、私立大学は、学生に人気がある分野だけでなく、人気のない分野にも教育・研究の機会を提供して、経営的にいえばとんとんになればいいというように受け持っておりまして。そのおいしいところだけに株式会社や予備校が入ってくるとなれば、私立の総合大学は黒字そして赤字部分のところもあって、ちょうど合計して利益が出なくともいいというようなところでやっておりますので、その基本的な構造が今つぶれていく感じがしております。私立大学、特に総合大学にとって一つの大きな転機を迎えております。どの方向に進めばいいのが、単に予備校とか株式会社立の大学が考えておられるように黒字が見込める分野だけをこれから伸ばすべきなのか。あるいは、教育というものはかなり公共的なものですので、ある程度赤字の分野もやはり維持すべきか。国立大学だけにそういう赤字の分野は任すべきなのか。大きな転換期にかかっております。

たとえば、同志社大学にはビジネススクールがあります。七十名の入学定員、今後はビジネススクールの卒業生が積極的に会社に採用していただける、そういう面では需要が見込まれる分野です。しかし、現実には京都大学も来年ビジネススクール、経営管理大学院を設置される。はたして国立はそこまでやるべきなのかどうか、疑問に思っているのですけれども、国立大学の学長にお話を聞くと、国立大学の存在意義は三つある。一つは低所得層の方々に教育の機会を提供するために国立大学はある。しかし、ご存知のように東大でも京大でもその学生の家庭の年収をみると国立大学の方が高いぐらいでして、同志社あるいは私立の大学の学生の保護者の方々の所得よりも向こうのほうが高いということがわかっております。高くないと子どもを塾や予備校にやれない、国公立に入れないという状態ですからはたしてこれがどこまで正しいのかはわかりません。国立大学の存在意義の二つ目は何かというと、基礎研究を行うことです。基礎研究というと、あまりお金にならない、しかし非常に、学問の発展にとっては大事な分野です。この分野は確かに、国立が得意かもしれません。ただこれも、私立でできないことはありません。三つ目は、地域貢献のために国立大学はある。これでも国立大学は、あまり地域貢献をしてこれませんでした。今でも京都大学附属病院は、救急患者を受け入れておりません。よほどのつてがある、あるいは自分がいつもそこに通院していると京大病院は受け入れてくれますけれども、それ以外の人は他の病院へ、となり、京大病院に救急車がどんどん入っているとは聞いておりません。周りの小さな、武田病院などが救急患者を受け入れております。地域貢献ということと、今まで国立はいつておられませんでしたけれども、最近は地域貢献、それから所得の低い方々に対する教育機会の提供、そして先ほどいいました基礎研究、この三つが国公立、特に国立大学の存在意義だといっておられます。が、どうもこれも怪しいなと思います。ロースクールにしろビジネススクールにしろ、そういう分野は別に私立で十分まかなっていただけますから、国立は進出される必要はないのではないかと私は考えています。小泉首相も官から民へといっておられますが、教育においても私は「官から民へ」があってもいいと思うんですけども、なかなか既得権益を離すことはないような感じがします。しかも国立大学の学長は今すごい力を持っておられて、以前の国立大学の学長はあまりたいしたことを実行できなかったのですが、今は大胆な施策を実行できるようになっております。ただ単に、国立大学の学長はそれを行使しないだけで、ある時に実行力のある学長が出てきて、自分の権限を、規定書を読まれると、自分はこんなことができるのか、理事長と総長というのが一つでし、強力な権限を持っている、ということに気がつかれるとすごいことになるかと私は考えております。

同志社大学の改革①

私立大学にとりまして、国立大学との競争、株式会社立大学との競争、そして少子化。こういう中で、どのような方向に我が同志社大学はすすむべきか。大きな転機を迎えているというのが私の基本認識です。学内の教職員の方々もこの危機意識を共有しつつあるのではないかと、そのような中で同志社大学が一三〇年を迎えて七十年後を見据えて、どういう方向に進むべきか、これは大学の今後の存在のかかった大きな決断ではないかと、なんらかのことをするとしたら、大きな転機ではないかと考えております。同志社大学は良心教育、良心を手腕に運用人物を育てるという確固たる建学の精神、キリスト教主義・自由主義・国際主義に基づいて教育を遂行していくという理念があります。ここから離れては同志社の存在意義はありません。単に学生を集めようと思えば、何らかの資格試験対応の学部をこしらえれば学生が集まるかもしれませんが。ただ、新しいことをやるに当たって、建学の精神、教育の理念から離れたものをつくるわけにはいかない。私立大学の存在の意義は建学の精神にあるわけですから、そこから離れたようなものはつくるわけにはいきません。そういう観点から同志社の今後を見据えるとどういう方向があるのか。

そこでようやく方向が見えてまいりました。一つは新しい学部、社会的要請に応じる学部をということで、昨年は政策学部を設置しました。四年間、今出川キャンパスで教育・研究活動を行う。まだ訪問しておられない方がいましたら、ぜひとも新町キャンパスに行ってくださいと思いますが、新たに臨光館という建物をつくり、ここが政策学部の教育の拠点になっております。政策学部の学生は主として新町キャンパスで四年間、授業を行います。先生方の研究室も、湊水館という新たな、昔の第一従規館という体育施設の跡に建設しました。四階建てです。そこに先生方は研究室を持っておられて、向かい側の臨光館で政策学部の授業を行っております。先生方の教育・研究の拠点と、授業を実施する建物が隣接して同一校地にある。学生にとっては、恵まれている環境だと考えております。

他の文系学部は、一・二年は京田辺、三・四年は今出川ということで先生方の研究拠点と一・二年の教育の場が離れています。工学部は一年生から四年生まで同じ場所で、京田辺で教育・研究を行っておりますから、そういう面では教育の物理的な一貫性は保たれている。政策学部、工学部以外の他の学部にはそれが無い。これをどうするか、やはり同志社教育ということによって何らかの手当てが、特に七十年後も視野にいれれば必要だろうということは今、当然考えられます。

昨年、工学部に新しい学科、環境システム学科と情報システムデザイン学科という二つの学科を新設しました。これも社会的な要請が強かった分野です。ＩＴ関連の技術者を情報システムデザイン学科で育てていく。環境システムデザイン学科では地球環境の問題を研究することが一つの大きな核になっております。また、生物環境、つまり人間環境、私たちの体の問題、バイオの分野をそこで研究していきます。環境システムデザイン学科には、医師の資格を持った方を採用しました。すでにお二人、京都府立医科大学から医師の資格を持った方に来ていただき、教育・研究活動をしていただいております。もうお一人は生物学関連分野の方を東大の先端科学技術研究所からお呼びして、研究・教育をしていただいております。府立医科大学と同志社大学は、学術交流協定を結んでおりますから、それを積極的に活用して先生方にも来ていただいておりますし、研究もしております。今、同志社大学の中には研究開発推進機構という中に、一つはバイオマーカー研究センターという、これは細胞を診断して新たな研究をしようというセンターがあります。医師の方を含めて三名の方がおられます。もう一つは再生医療研究センター、これは府立医科大学の眼科が中心で角膜の再生を研究しているセンターであります。三番目の、府立医科大学の先生方とのコラボレーションを基礎にしたセンターとして、アンチエイジング・リサーチセンターという抗加齢を研究するセンターもできあがりました。今アンチエイジングが大流行でして、先日もNHKの朝の番組でアンチエイジングの最前線というテーマで、本学のアンチエイジング・リサーチセンターの米井先生が、アンチエイジングのためのサプリメントにはどのようなものがあるかなどを紹介しておられました。今、米井先生が進んで同志社大学の中にアンチエイジング・ドックを開設したいという提案を受けております。骨の密度を測定したり、いろいろな酵素を調べたり血液検査をして、あなたはこういうサプリメントを摂取すると若さを保つことができますよ、とアドバイスをするコースを設置したいという話が出ております。こういう三つの医療がらみのセンター、同志社大学には、医師の資格をもった方が十名近くおられます。環境システム学科と三つの医療がらみの研究センター、そして、心理学の中にも、心と体の問題を研究するセンターが二つありますし、医工連携という形で医学分野、バイオ分野の大きな土壌が同志社大学の中に形成されつつあります。

また、現在、精華町に新しい病院ができあがりつつあります。約二〇〇床を有する学研都市病院という病院です。学研都市の中にこれまで大きな病院がありませんでした。この学研都市病院と同志社大学が、過日学術交流協定を結びました。そして、学研都市病院の先生方に同志社大学の研究者として入っていただく。そして本学も積極的にその学研都市病院を利用させていただくという協定を結びました。いよいよこれで先ほど申しましたように、環境システム学科がある、三つの医療センターがある、医学研究センターがある。そして学研都市病院と結びつくことで、一つの大きな今後の方向性を示唆する土壌が同志社大学にできあがりました。

同志社大学の改革②

先ほど申しましたように、文系学部の一・二年と三・四年の教育実践の場が離れているという一つの大きな課題があり、そして同志社大学の中には医学がらみ、バイオがらみの大きな土壌ができつつあります。今後十年後の同志社大学は、これらを解決する方向で動いていくのではないかと私は予感しております。しかも来年には同志社小学校が岩倉校地に完成します。すでに新入生九十名の募集が終わりまして合格発表も済ませました。これから一月にかけて、新二年生、新三年生の編入試験を行うことになっています。新三年生が来年入ってまいりますと、新三年生が小学校を卒業するのが二〇一〇年の三月ということになります。そして彼らは同志社の学内中学校に推薦入学をすることになっております。大多数は同志社中学校に入ることになります。その同志社中学は二〇一〇年九月に岩倉に全面的に移転をすることになっております。そうすると、新三年生が小学校を卒業して、このままの計画でいけば半年間は今出川の中学校のキャンパスに来ますけれども、九月からは岩倉で三年間過ごし、そしてあとの三年間を同志社高校で過ごすことになります。

同志社大学にとっての課題は、それでは中学校が岩倉へ移転した跡を大学がどのように利用するのかということになります。先ほど申しましたように、一・二年と三・四年は文系系は離れている。これをどう解決するのか。それと社会的な要請もありまして、京田辺キャンパスでどのような新たな展開をしていくのか、これも同志社大学にとっての大きな課題です。こういうことを見据えて、今後の、同志社大学の教育を考えていく一つの方向性が見えてまいります。過日、「大学将来構想委員会」から一つの答申をいただきました。その一つが京田辺キャンパスに生命分野の学部を二つ新設すればどうか、そういう提言でした。すでに同志社大学には九つの学部があります。政策学部、社会学部が増えました。京田辺では文化情報学部という文理融合型の、工学部よりは少し文系に近い、データ解析の手法をもって文化や言語を分析していこう、研究していこうという学部ができました。今九つ学部があります。文化情報学部はこの春にできまして、四年間京田辺で教育・研究活動を行います。そして、さらにあと二つ学部をつくればどうでしょうかという提言をいただきました。一つが生命科学部（仮称）です。すでに京都新聞に同志社大学に医系学部ができる、医学関連の学部ができるという記事が出ておましてご存知かと思います。工学部の環境システム学科がある、三つの医療関係のセンター、研究センターがある、学研都市病院と連携をしている、これらを基盤とすれば一つの新しいバイオ分野の学部ができるのではないかと。しかもこれができれば工学部に及ぼす影響は非常に大きいんじゃないか。政策学部が四年間、一学年四〇〇人という規模で、先生方が二十七人、恵まれた教育環境の下で授業を行っておられる。これは他の学部に対する競争的な圧力が非常に強いと思います。これからの少子化の時代、大学間競争が激しくなる。これは同志社大学と他の大学の競争でもあるんですけども、もっと大きいのは学部間の競争。まずこれが基本にあると私は考えております。経済学部と商学部と法学部、そして政策学部が競争することによって、大学全体としてそれぞれの学部教育がいい方向にいく。同志社大学の、あるいは同志社の教育に及ぼす影響は大きいと考えております。今、工学部は唯一大学の中の競争なしで京田辺で教育・研究活動を展開しておられる。ここに新たな学部ができれば、工学部との間で競合が起こるだろう。これによって理系系の教育がよくなると私は考えておりますし、生命科学部（仮称）ができることによって工学部の教育・研究活動もレベルアップしていくのではないかと。それと同時に生命科学という新たな、同志社に今までなかった教育・研究活動ができる。

新島先生は医学部の設置を念願しておられました。現在、歯学部、医学部、獣医学部、船舶職員養成学部の新設は抑制するという文部科学省の方針があります。ただ、医師を育てることはできませんけれども、医学部が行っている研究と同じことを生命科学部でもできるのではないかと。それをすることによって就職先の確保もできるのではないかと私は考えております。いよいよ生命科学部をつくるかどうかの学内での審議がこれから始まっていくのではないかと思います。その土壌はできつつありますし、新島先生が同志社教育の完成は二〇〇年後だとおっしゃっておりました。その構想の一つに医学部があったんですけれども、今のところ医学部の新設は難しい。しかし、研修医を終わったらレベルの人びとを集めて医学教育、医師の教育ではなくて医学教育、ライフサイエンスの教育・研究ができるのではないかと考えております。その一つの拠点が京田辺キャンパスだと私は考えております。

それともう一つ、それでは今出川キャンパスをどうするかということですが、文系の学部はすべて今出川キャンパスで教育・研究活動を実施すればどうかという答申をいただいております。京都市からは大学が流出する一方で。もし文系学部一・二年生が今出川キャンパスに来れば七〇〇〇名の学生が来ることになります。女子大学は二〇〇九年までに一五〇〇名の英語英文学科、日本語日本文学科の授業を今出川で実施することをすでに決めておられます。もしこれが実現すれば、同志社大学が七〇〇〇名、女子大学が一五〇〇名、一万名近い学生が今出川に集結することになります。大学流出が続いていた京都市にとっても、朗報ではないかと考えております。それに対して京都市はどのような支援をしてくれるのか、今から楽しみにしています。草津市は立命館大学に来てもらうために広大な土地を提供いたしましたし、大分県は二〇〇億円ぐらい立命館アジア太平洋大学のためにお金を出してくれました。

もう一つ、新島先生は遺言のなかで東京へ進出するということも書いておられました。東京に経済学部とか商学部とか経営学部の分校を置くということも遺言に残しておられますけれども、私は、同志社は京都にあってこそその同志社であって、もう少し、同志社の京都での地位というか、ポジションというか、基盤を固めてからなら、東京に出ていくことができるかもわかりませんけれども、物理的には私は出て行く必要はないと思っています。現在の遠隔教育、ＩＴの技術を利用すれば、東京へ出ていく必要はないのではないかと考えております。

同志社大学のこれから

同志社の二〇〇年を見据えた教育が一三〇年経ちました。大学が専門学校令による大学となったのは一九二二年です。今から、九十三年前です。大学という形をとって、戦後になりまして六学部体制で五十五年間、半世紀以上は六学部体制でやってまいりました。二一世紀になって、ようやく九学部体制。二〇一〇年以降くらいになるとひょっとしたら十一学部体制、あるいはもう一つくらい学部ができるかもわかりません。先ほどいいましたあと二つの学部のうち、もう一つの学部は、スポーツ健康科学部（仮称）です。生涯スポーツや健康ということを考えると、生命科学部と同時にスポーツというもののがやはり大事ではないかということで、もう一つ京田辺で今後考えられようとしています。答申には「二〇〇八年をめどに」と書いてあります。二〇〇八年ということとあともう三年先なんですけれども、この二つがもし実現しますと同志社大学は十一学部体制になります。

京田辺では理系系の最先端の研究・教育、あるいは生命科学を中心とした学部が創設されようとしております。一方で、一・二年生の教育を今出川キャンパスで実施する形で、今出川の発展が目指されています。ここ数年間はそういう基盤ができあがる期間、大事な準備期間だと考えております。同志社大学が大きく羽ばたく、離陸する。離陸するにはちょっと滑走期間が長すぎた感じがしますがそれでも、滑走期間が長ければ長いほど大きな重い飛行機を空中に飛ばすことができるのではないかと。今そういう面では滑走路の最終段階の離陸の一手前にいるのではないかと、というのが私の同志社大学に対する今の見方であり、そういう位置にいるのではないかと、理解しております。

今後とも同志社大学が大きく羽ばたくためには物理的な条件も必要ですけれども、それとともに、学内の方々あるいは卒業生の方々の理解が必要です。やはり、卒業生も含めたすべての方々にいろいろと理解をし、ご支援をしていただく。その声があれば私は大学長としてなかなか大きな決断をすることはできません。もちろん危機意識を共有することも必要ですけれども、学長の大きな決断というのは、危機意識と共に学内、そして学校外の方々から「学長は大きな決断を行うべきだ」という励ましの声があってこそ、私は学長のリーダーシップが発揮できるのではないかと考えております。そういう面において、こういう場所一般の方々を含めた方々を対象に私の一つの所信表明といいますか、お話ができる機会を与えていただいたというのは大きな喜びです。先日も大丸百貨店で、約二〇〇名の一般の方々を対象に、学長が今後の同志社の夢を語るという機会がありました。積極的にこういう夢を語る機会を増やし、そして皆様方との対話を増やしていく。そしてまたいろんなご意見を頂戴する。それを大学運営に活かす。そういうことが必要ではないか、そのように考えております。私一人が機関車のように進んで、後ろを見れば後ろの客車があった、何もなかったというのが一番悪い状態じゃないかと思います。これからも皆様方の温かいご支援と叱咤激励を頂戴して、それをまたエネルギーに見て進んで行きたいと考えております。ご清聴ありがとうございました。

